

j-milkレポート

vol-7
2013.WINTER

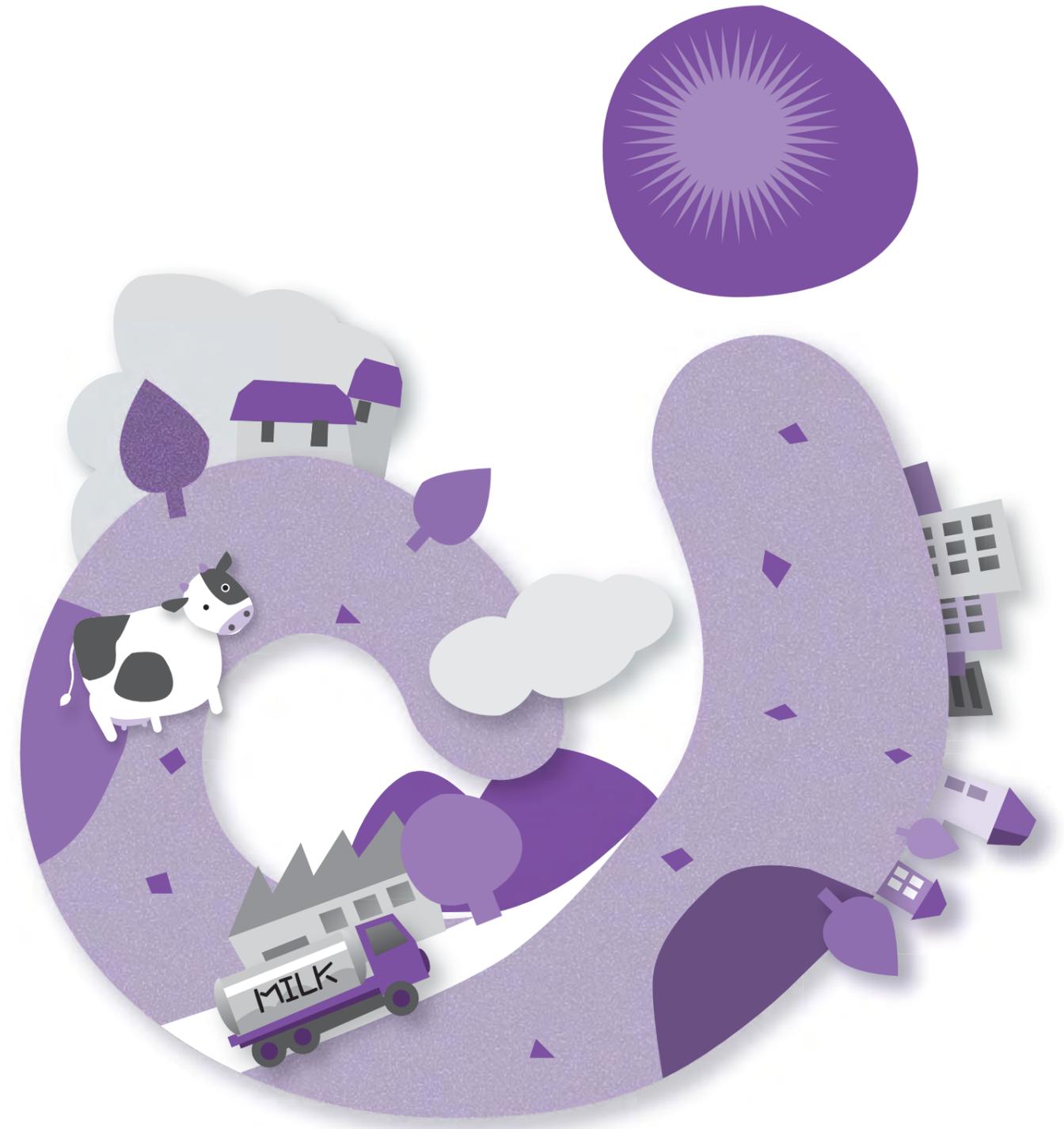
- <乳の学術連合の窓> 心を核に、新しい食育研究を
- 平成25年度生乳及び牛乳乳製品の需給見通しを発表
- ダイエット意識は牛乳飲用行動の阻害要因ではない（Jミルク調査）



j-milkレポート
vol.7

j-milkレポート vol.7 発行日/2013年1月
編集・発行/社団法人 日本酪農乳業協会

住所:〒104-0045 東京都中央区築地4丁目7番1号 築地三井ビル5階
TEL.03-6226-6351 FAX.03-6226-6354
ホームページアドレス <http://www.j-milk.jp/>



- 03... 心を核に、新しい食育研究を
文部科学省・国立教育政策研究所、教育課程研究センター基礎研究部・部長
広島大学名誉教授・教育学博士 角屋重樹氏
- 05... 「乳の学術連合」が初の運営委員会を開催
第1回「乳の学術連合」運営委員会
- 06... 25年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通し
需給予測
- 08... ダイエット意識は牛乳飲用行動の阻害要因ではない
Jミルク調査
- 11... 都市近郊の牧場をメディア関係者と体験訪問
- 12... Jミルクの活動：10～12月の主な活動報告
- 14... 今後の国際的な穀物・食糧事情について情報共有
- 15... 牛乳食育研究会設立総会を開催
- 15... メディア懇談会を開催
- 16... 平成25年乳業13団体合同新年賀詞交歓会開催
- 16... ミルクレシピを紹介しています
- 17... 牛乳乳製品の国内生産額は増加
- 18... 世界の酪農乳業の経験を共有化する貴重な機会!
海外視察報告
- 19... 各地においてブロック会議を開催
- 19... 今後のスケジュール
- 19... 編集後記

乳の学術連合の窓



乳の学術連合の会員の先生方に、ご登場いただくコーナーです。

心を核に、新しい食育研究を

乳の学術連合の研究組織のひとつ「牛乳食育研究会」が昨年10月に発足した。設立趣意書には、「ライフステージに対応した課題解決型の『食と教育』の体系的な研究、学校や家庭にとって身近な乳（酪農や牛乳乳製品）の持つ優れた教育的・栄養学的可能性を活かした教育プログラムや実践的教材の研究、学校関係者及び家庭向けの情報開発などを行い、『食と教育』に係る取組みを推進・支援する」と謳われている。研究会の発足にあたって代表幹事である角屋重樹先生に、現在の食に係る教育の現状・課題、今後の研究会の食と教育に対する役割、牛乳を食に係る教育に活用することの意義などについてお話しいただいた。



角屋重樹氏

文部科学省・国立教育政策研究所
教育課程研究センター基礎研究部・部長
広島大学名誉教授・教育学博士

食育は心の教育

戦後は、食糧不足という状況で栄養バランスをはじめとした、食の教育が自然と成り立ってきたが、現在は食事の量も質も保たれ、食に対する教育は大きく変化した。これからは、食べることを通して、人や食べ物に対する感謝する気持ちや家族のコミュニケーションを行えるような心を育てる教育が必要である。このような教育をしないと、粗雑で自分勝手な人間がたくさんできてしまうのではないかと感じている。こういう現状を考えると、食育は心の教育にしなければいけない。

牛乳食育研究会の役割としては、牛乳乳製品を中心として、酪農現場でそれがどうつくられているか。つくられた牛乳乳製品がどのように流通しているか。3つ目は学校や家庭での食育でどう心の教育につなげていくか。この3部門から研究していく。

1. 酪農現場の<工夫>をキーワードに働く魅力の研究

つくる部門では、キャリア教育としての酪農ではなく、もっと酪農家たちの工夫に焦点を当てた研究が必要。それによって子供たちが自分もその道のプロになりたいという気を起こし、夢を持てるような、働く魅力を研究していくのがー。

2. 牛乳乳製品の生活者目線での流通に関する研究

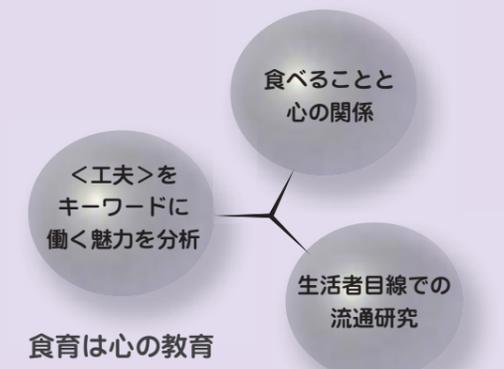
流過程では量と質の問題がある。生活者にとっての適度、適切な量があると思う。その視点で流通機構を分析、研究していく。

3. 食べることと心の教育

3つ目は、牛乳乳製品を活用して学校、あるいは家庭でどのように心の教育に結び付けていくか。こうした研究は今までにはない。食べることを徹底的に分析して、そこから食べ方の問題、あるいは心との関係を研究する。

学校教育では幼児の場合と小学校以上の研究は違っていい。幼児の場合はしつけ教育になるからである。学校教育の場合は、人との関係の部分、対人関係によってどういう風に食が進むか。おいしいものでも心の状態によってはまずく感じるという心の状態との関係。そういう研究があっいい。家庭の中では、本来ならば皆で一緒に食べなければならないが、多分家族のあり方によって幾つかのパターンがあり、それによる食行動の研究をしていきたい。

これらは私が想定していることで、学術研究公募ではもっと違ったものが出てくるかもしれないが、いずれにしても新しい研究を期待している。これらの研究を通じて、心の教育を行うことが牛乳食育研究会の役割だと思っている。

食べることと
心の関係<工夫>を
キーワードに
働く魅力を分析生活者目線での
流通研究

食育は心の教育

分析を通して今後どう働きかけていくか

いま言ってきたことは全分析手法である。その分析を通して、今後どういう風に問いかけ、働きかけをしていくか。

例えば酪農家の生きる姿を見せるとなると、酪農家は子供たちにどう説明するのが最適なのか。それを学校の先生はどうサポートするか。あるいはJミルク、酪農教育ファームの人たちの関与の仕方、流通過程では、相手のことを考えずに量だけ増やしてもだめ。相手意識の中、つまり生産者と生活者の中での流通組織をどうするか。学校や家庭では牛乳乳製品を中心としながら食育の姿を変えていく。食事全体を考えているんな提言ができるようにしたい。

自己の成長の振り返りを促す

心と食を結びつける時、食べる時は一人じゃない、集団、複数人いるということが大きな条件である。そして話題を何にするか。これさえ明確にしておけば会話が成立する。それが家族の絆、あるいは集団の絆になる。コミュニケーションが成立するというのは心の安定である。自分をわかってもらえれば相手のこともわかる。

子供の食べている様子や家庭での食事の様子をつぶさに分析すると、そこに共通の話題がない。家庭でのコミュニケーションの基本形は一日を語るということである。

学校教育はこれから時間とともに自分がどう変容したかという自己評価をやっていくと思う。どういう風にして自己の成長を感じるか。昔は日記を書かせた。それは自己の成長の振り返りである。一日に自分がどう変化したかという自己の振り返りまでもっていくことができる。

我々は牛乳乳製品をきっかけにして子どもたちや家庭がどう変容して行くのかを考え、心を核にした教育理論や食育研究を組み立てていくことが重要であると考えている。

これまでの研究は、海外でやっているから日本でもという発想で、自分達で考え出していない。教育は海外のものをそのまま取り込めない。日本には、フビ、サビという感性を持った心が基盤にある。心を核にしながら教育理論や研究を組み立て、日本独自の教育的価値を見出さなければいけない。

食育は人間の育みです。皆と生きる喜び。人間の心に対する回帰。我々は牛乳乳製品をきっかけにして、子供たちや家庭がどう変容していくのかを考え、心を核にした教育理論や食育研究を組み立てていくことが重要であると考えている。



ふれあいイベント風景



食育研修会風景

栄養士向けセミナー風景

食育基本法からみた食育のねらい

食育を推進する原動力となった「食育基本法」は、平成17年6月に制定され、その中で以下のように課題を定義し、国や地方公共団体の義務や役割、生産者や消費者、流通関係者、教育関係者、保護者等の多くの食育に関わる人々の努力内容を規定している。

国民一人一人が「食」について改めて意識を高め、自然の恩恵や「食」に関わる人々の様々な活動への感謝の念や理解を深めつつ、「食に関して信頼できる情報に基づく適切な判断を行う能力を身に付けることによって、心身の健康を増進する健全な食生活を実践するために、今こそ、家庭、学校、保育所、地域等を中心に、国民運動として、食育の推進に取り組んでいくことが、我々に課せられている課題である」(食育基本法前文より)

食育基本法における食育の4つのねらい

- ① 食についての意識を高める
- ② 自然の恩恵や食に関わる人々の理解を深め、感謝の念を持つ
- ③ 食に関して適切な判断を行う
- ④ 健全な食生活を実践する

Pick Up

第1回「乳の学術連合」運営委員会

「乳の学術連合」が初の運営委員会を開催

世界でも類を見ない組織横断的な共同活動。「乳の学術連合」が活動計画について協議。

「牛乳乳製品健康科学会議」、「乳の社会文化ネットワーク」、「牛乳食育研究会」が、組織横断的な共同活動を行う連合体として今年度設立された「乳の学術連合」。

この「乳の学術連合」の第1回運営委員会が、12月25日、東京国際フォーラムにおいて開催され、「運営規約の制定」について協議を行った後、「乳の学術連合」委員長に折茂肇氏、副委員長に和仁皓明氏、角屋重樹氏、事務局長に前田浩史氏を選任した。

乳の学術連合運営委員

構成組織	氏名	所属
● 牛乳乳製品健康科学会議	折茂 肇	(公社)骨粗鬆症財団 理事長
	中村 丁次	神奈川県立保健福祉大学 学長
	高見 裕博	(社)日本酪農乳業協会 常勤理事
● ネットワーク	和仁 皓明	西日本食文化研究会 主宰
	生源寺 真一	名古屋大学大学院 生命農学研究科 教授
● 牛乳食育研究会	前田 浩史	(社)日本酪農乳業協会 専務理事
● 普及専門部会	角屋 重樹	文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部部長
	田中 博之	早稲田大学教職大学院 教授
	石井 雅幸	大妻女子大学家政学部児童学科 准教授
● マーケティング委員会	土岡 英明	雪印メグミルク株式会社 取締役執行役員営業統括担当
	赤尾 學	東海酪農協同組合連合会 代表理事専務
● マーケティング委員会	原 宰	株式会社明治 乳製品ユニット市乳事業本部市乳企画部長
	齋藤 淳	(社)中央酪農会議 酪農理解促進室 室長補佐

●は委員長、●は副委員長、●は事務局長

協議

- (1) 「乳の学術連合」運営規約の制定について
- (2) 委員長・副委員長・事務局長の選任について
- (3) 平成24年度の活動経過報告について
- (4) 平成25年度の活動計画について



24年度活動経過と25年度活動計画

共同活動初年度となる24年度は、6月に行われた「牛乳の日」シンポジウム、25年度「乳の学術連合」学術研究の公募を行ったこと等が報告された。

また、25年度における共同活動計画案として以下の内容について協議を行った。

1. 共同研究公募及び研究成果の発表、広報について
 - (1) 学術フォーラムの開催
 - (2) 研究公募の実施
 - (3) 研究叢書の制作・発刊
 - (4) 研究発表会の開催
2. 横断的な研究交流及び共同研究について
3. 海外研究情報の収集及び国際的な学術ネットワークの構築について
4. 運営委員会の開催

特に、今年10月28日～11月1日に横浜で開催される「World Dairy Summit 2013」においては、「乳の学術連合」のメンバーによる講演、発表の他、ブースを出展し、組織及び活動内容を紹介するとともに、国内外の研究者とのネットワークを構築する等が確認された。

「乳の学術連合」として学術研究を公募しています

今年度の共同の取り組みとして、平成25年度「乳の学術連合」学術研究の公募を行っています。1月31日を締切として、公募案内を大学、研究機関等1874か所に送付しました。

詳細はこちらをご覧ください
<http://www.j-milk.jp/beroh00000ah8d.html>



需給予測

25年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通し

「平成25年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと今後の課題について」(公表:平成25年1月28日)要約・抜粋

平成25年度 生乳生産量及び用途別処理量(見通し)

(単位:千t)

	上期		下期		年度計			
		前年同期比		前年同期比		前年比	前年差異	
生乳生産量	3,838	99.9%	3,722	98.8%	7,560	99.4%	▲46	
北海道	2,017	101.6%	1,953	100.3%	3,970	101.0%	38	
都府県	1,821	98.2%	1,769	97.2%	3,590	97.7%	▲84	
自家消費量	29	99.9%	29	98.8%	58	99.3%	▲0	
生乳供給量	3,809	99.9%	3,693	98.8%	7,502	99.4%	▲46	
処理	牛乳等向処理量	2,058	99.3%	1,923	98.7%	3,981	99.0%	▲40
	乳製品向処理量	1,751	100.7%	1,771	99.0%	3,521	99.8%	▲6

平成25年度 牛乳等生産量(見通し)

(単位:千kl)

	上期		下期		年度計			
		前年同期比		前年同期比		前年比	前年差異	
牛乳等生産量	牛乳	1,543	99.1%	1,462	97.9%	3,005	98.5%	▲45
	加工乳	72	99.9%	65	95.8%	137	97.9%	▲3
	成分調整牛乳	189	98.5%	170	100.1%	359	99.3%	▲3
	乳飲料	703	98.4%	616	99.2%	1,318	98.8%	▲16
	はっ酵乳	530	103.0%	501	106.4%	1,031	104.6%	46
牛乳類(牛乳・加工乳・成分調整牛乳・乳飲料)	2,507	98.9%	2,313	98.3%	4,820	98.6%	▲67	

【乳製品需給の見通し】

25年度の乳製品向処理量は、24年度と同程度かやや下回る程度で推移すると見込まれ、その他乳製品向処理量が24年度と同程度と見込まれることから、特定乳製品向処理量及び脱脂粉乳・バターを生産量についても、24年度と同程度かやや下回る程度で推移するものと見込まれる。

25年度の脱脂粉乳・バターの消費量は、供給面における制約の継続は国内乳製品需要の減退を招く懸念もあるため業界をあげた対応が必要であるという認識も醸成されており、24年度を上回って推移するものと見込まれる。

25年度の脱脂粉乳・バターの在庫量については、今後のカレントアクセス等による輸入量を勘案しても、脱脂粉乳・バターともに、依然、生産量が消費量を下回る状況が継続すると見込まれることから、24年度をやや下回る見込みである。

脱脂粉乳の需給の推移(実績及び見通し)

(単位:千t)

	生産量		輸入量(売渡)	供給量		消費量		過不足	年度末在庫量(民間在庫)		
	A	前年比		A+B	前年比	C	前年比		A+B-C	月数	前年比
21年度	170.2	109.6%	6.1	176.3	113.5%	149.7	96.6%	26.6	69.7	5.4	161.7%
22年度	148.8	87.4%	1.0	149.8	85.0%	160.8	107.4%	▲11.0	58.7	4.7	84.2%
23年度	134.9	90.7%	0.0	134.9	90.1%	146.0	90.8%	▲11.1	47.6	3.8	81.1%
24年度	136.8	101.4%	0.0	136.8	101.4%	141.0	96.6%	▲4.2	43.4	3.6	91.2%
25年度	136.3	99.6%	8.2	144.5	105.6%	145.3	103.0%	▲0.8	42.7	3.6	98.2%

※23年度まで実績。24年度及び25年度は見通し。

※25年度の輸入量は、カレントアクセス枠量からホエイ類輸入見込み量4.5千トン分を除いた残量を、脱脂粉乳・バターで半分ずつ輸入した場合で仮定。

バターの需給の推移(実績及び見通し)

(単位:千t)

	生産量		輸入量(売渡)	供給量		消費量		過不足	年度末在庫量(民間在庫)		
	A	前年比		A+B	前年比	C	前年比		A+B-C	月数	前年比
21年度	82.0	114.0%	0.0	82.0	94.9%	77.5	100.0%	4.5	32.6	5.0	116.0%
22年度	70.1	85.5%	1.6	71.8	87.5%	83.7	108.0%	▲12.0	20.6	3.2	63.3%
23年度	63.1	89.9%	13.6	76.7	106.8%	78.2	93.4%	▲1.5	19.1	2.8	92.6%
24年度	70.3	111.5%	9.4	79.7	104.0%	75.2	96.2%	4.5	23.6	3.6	123.8%
25年度	70.1	99.6%	4.3	74.4	93.3%	76.2	101.3%	▲1.3	21.8	3.5	92.4%

※23年度まで実績。24年度及び25年度は見通し。

※25年度の輸入量は、カレントアクセス枠量からホエイ類輸入見込み量4.5千トン分を除いた残量を、脱脂粉乳・バターで半分ずつ輸入した場合で仮定。

脱脂粉乳ベースの国産生乳需要量の推移(実績及び見通し)

(単位:千t)

	生乳供給量		国産生乳需要量				供給量と国産需要量の差		《参考》供給量と総需要量の差	
	A	前年比	B	前年比	牛乳等向		乳製品向			
					前年比	前年比	前年比	前年比		
21年度	7,805	99.2%	7,488	95.2%	4,219	95.6%	3,269	94.8%	318	244
22年度	7,560	96.9%	7,693	102.7%	4,110	97.4%	3,583	109.6%	▲133	▲145
23年度	7,470	98.8%	7,604	98.8%	4,083	99.3%	3,521	98.3%	▲134	▲134
24年度	7,548	101.0%	7,601	100.0%	4,020	98.5%	3,580	101.7%	▲53	▲53
25年度	7,502	99.4%	7,512	98.8%	3,981	99.0%	3,531	98.6%	▲10	▲113

※23年度まで実績。24年度及び25年度は見通し。

バターベースの国産生乳需要量の推移(実績及び見通し)

(単位:千t)

	生乳供給量		国産生乳需要量				供給量と国産需要量の差		《参考》供給量と総需要量の差	
	A	前年比	B	前年比	牛乳等向		乳製品向			
					前年比	前年比	前年比	前年比		
21年度	7,805	99.2%	7,694	100.7%	4,219	95.6%	3,476	107.8%	111	111
22年度	7,560	96.9%	7,867	102.2%	4,110	97.4%	3,757	108.1%	▲306	▲348
23年度	7,470	98.8%	7,509	95.5%	4,083	99.3%	3,427	91.2%	▲39	▲391
24年度	7,548	101.0%	7,437	99.0%	4,020	98.5%	3,417	99.7%	111	▲119
25年度	7,502	99.4%	7,546	101.5%	3,981	99.0%	3,565	104.4%	▲44	▲149

※23年度まで実績。24年度及び25年度は見通し。

【国産生乳需要の見通し】

国産生乳需要量(国内の総生乳需要量からカレントアクセス等輸入量に相当する生乳需要量を差し引いて算出)は、脱脂粉乳ベース(脱脂粉乳需要量を満たすために必要な生乳供給量)で7,512千トン、バターベース(バター需要量を満たすために必要な生乳供給量)で7,546千トンと見込まれる。

現状見込まれる生乳供給量と比較すると、脱脂粉乳ベースで▲10千トン、バターベースで▲44千トンと、いずれも供給量が需要量を下回るものと見込まれる。

需給動向を踏まえた今後の課題と対応について

(1) 生乳生産基盤の維持・強化

24年度の生乳生産量は17年度以来7年ぶりに前年度を上回る見込みであり、継続してなお一層の生乳生産の拡大が期待される。25年度の生乳生産量は、本予測においては全国計で前年度をやや下回る程度と見込まれる。

こうした状況を踏まえると、直面する飼料価格高騰やTPPをはじめとする貿易自由化問題に適切に対応するとともに、生乳生産基盤の根幹である酪農生産者戸数や乳牛頭数の減少に歯止めをかけ、新規就農や規模拡大を促進するための対策を業界が一体となって積極的かつ具体的に取り組んでいくことが急務となっている。

また、政府にあっては、今後、国産牛乳乳製品の需要の回復・定着を図る需要基盤強化対策を推進することとしている。こうした施策も踏まえ、酪農乳業としても、今後、需給が緩和するようなことがあっても減産をしないで安心して生乳生産できるような需給セーフティネット等の対策について、政府と業界が一体となって取り組むことも重要な課題である。

なお、以上のような対策を確実なものとするため、情報の共有化に努めるとともに、酪農乳業共同での取り組みの推進のため、縦横での連携強化を図っていく必要がある。

(2) 牛乳乳製品需要の拡大

25年度の牛乳類全体需要については、やや下げ止まり感はあるものの、依然として減少基調で推移する見込みであることから、牛乳乳製品の価値向上を図る対策への業界の取り組みを強化し、需要の確保を図っていくことが重要である。

特に市場の拡大が期待される「はっ酵乳」については、最近の需要増加を一過性のものとしないうにするとともに、酪農乳業の基幹商品である「牛乳」についても、消費減退に歯止めをかけ、価値を反映した適正な価格形成がおこなわれるよう、価値訴求と安定供給などの取り組みを業界が連携して推進していくことが求められる。

25年度の脱脂粉乳の需給については、適切な時期にカレントアクセスが手当てされ、供給の安定化が図られること等から、需要増加の見込みである。バターの需給についても、需要が前年度をやや上回ると見込まれており、特に需要期における需給混乱を避け市場が縮小均衡しないように政府と業界が連携した対応が必要である。

(3) 的確な需給調整対応の実施

25年度の需給状況は、依然、供給・需要の何れの環境も予断を許さない複雑な状況が継続することが予測される。こうしたことから、酪農乳業関係者は、市場に大きな混乱が生じ需要の喪失が起らないよう、日々の需給動向に注視するとともに情報の共有化、情報発信に努め、消費者やユーザーに不安や不信を与えないよう、的確な需給対応を実施する必要がある。

※ページの関係で一部要約・抜粋となっております。詳細はHPをご覧ください。なおHPでは最新の需給予測を都度掲載しております。

<http://www.j-milk.jp/gyokai/jukyuu/9fgd1p00002e7dd.html>

Jミルク調査

ダイエット意識は牛乳飲用行動の阻害要因ではない

「牛乳製品に関する食生活動向調査2012」速報版からみた食生活意識と牛乳関与

Jミルクでは、本年度から「牛乳製品に関する食生活動向調査」を定期的実施（基本的な調査項目は毎年）することとし、第1回目の調査を10～11月にかけて実施した。

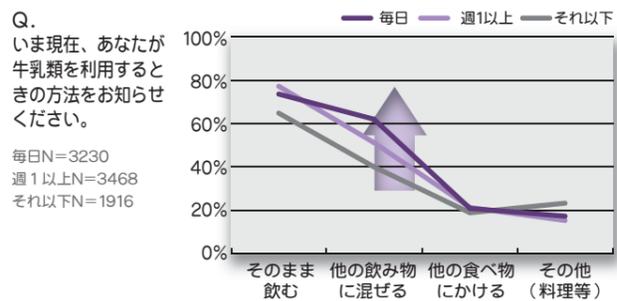
この調査は、①牛乳消費拡大（牛乳製品の価格向上）を推進（戦略の構築と改善）するための基本情報を得ること、②Jミルクの普及関連事業の効果検証の基礎とすることを目的としている。以下は、本年度調査の中から得られた主な知見を速報としてまとめたものである。

牛乳類の消費は二極化が進んでいる

- 牛乳類の飲用(利用)頻度は、「毎日」が3分の1、「週1～6日」が3分の1、「週1未満」が3分の1の割合である。これを男女別にみると、女性の飲用(利用)頻度が多く、年齢別にみると、年齢が高くなるほど飲用(利用)頻度が多くなっており、この傾向は女性において顕著である。
- 最近の牛乳飲用量の変化では、「増加している」人が17%、「減っている」人が20%で、減少の方が3%多い。この数値は牛乳消費量全体の变化に符合している。中でも、女性10代では増加より減少が20%も多く特に減少が顕著である。
- なお、牛乳類の飲用(利用)頻度が多い人ほど増加が多く、逆に少ない人ほど減少が多いことから、牛乳類の消費において、ヘビーユーザーとライトユーザーの二極化が進んでいることがわかった。

調査概要

	第一次調査	第二次調査
調査手法	インターネットを活用した生活者パネルに対する年1回のアンケート調査	
対象者	15～60代の男女	3～18才の子どもを持つ主婦
サンプル数	10,000サンプル	600サンプル
実施時期	毎年10月	毎年11月
割付	総務省統計局の平成22年の人口構成データなどを参考に実際の性別、年代、地域の構成比に近似させる。	



飲用頻度が高いほど「他の飲み物に混ぜる」

- 牛乳類の利用方法は、「そのまま飲む」が56%、「他の飲み物に混ぜる」が33%、「他の食べ物にかける」が5%、「その他(料理等)」が6%である。これを男女別にみると、男性の方が女性に比べ「そのまま飲む」が多く、女性の方が男性に比べ、「他の飲み物に混ぜる」、「その他(料理等)」が多い。
- 「他の食べ物にかける」利用方法についてみると、男女とも、若い世代の方が明らかに多い。これは「シリアル」摂取時の牛乳利用であると推察できる。
- 「他の飲み物に混ぜる」利用方法についてみると、女性の30代、40代においてが際立って多いのが特徴である。

「カルシウム機能への期待」が飲用増加に寄与

- 牛乳飲用量増加者の増加理由をみると、「カルシウムを意識」「栄養を意識」「骨の状態を良くしたい」の三つの理由が特に多く、牛乳の栄養のなかでもカルシウムの機能への期待が特に強いことがわかる。
- 男女別年齢別にみると、女性の高年齢層においては「骨の状態を良くしたい」を増加理由とする比率が際立って高く、

男性の高年齢層においては「生活習慣病予防」を増加理由とする比率が高い傾向にある。

- なお、母親層(女性30代40代)において、「カフェオレ」を増加理由としてあげる比率が特に高くなっている。このことから、先に報告した牛乳類の利用方法の中で、女性30代40代において「他の飲み物に混ぜる」が際立って多いのは、「カフェオレ」利用がその背景にあるものと思われる。
- また、母親層にあつては「子供の影響」が、10代男性にあつては「身長を伸ばしたい」が、牛乳飲用量の増加理由として他に比べて突出して高い。

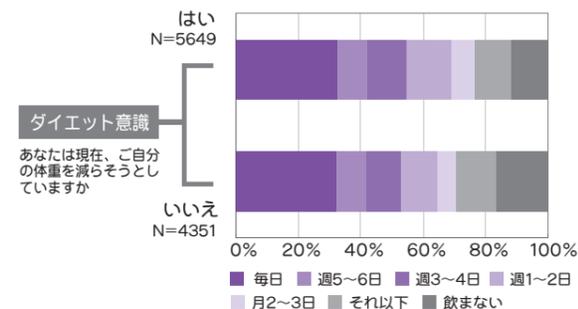
健康・栄養に対する知識を高めることが重要

- 「健康状態を意識している、気をつけている」ことが「よくある」人は16%、「ある」人は46%、合計で全体の約6割であった。また、「食品に含まれる成分(栄養素)」に「関心が非常にある」人は14%、「関心がある」人は57%、合計で全体の約7割であった。
- こうした健康に対する意識、栄養に対する意識と牛乳類の飲用・利用頻度の関係を見ると、いずれもそうした意識が強い人ほど、牛乳類の飲用・利用頻度が明らかに多いことがわかった。こうしたことから、牛乳類の飲用・利用頻度を高めるためには、まず健康・栄養に対する知識を強めるような施策を推進することが、極めて重要であることがわかった。

ダイエット→栄養バランス→牛乳の訴求が効果的

- 現在「体重を減らそうとしている」ダイエット意識をもった人は、全体の57%で、これを男女・年齢別にみると、男性は40代がピークで10代20代の意識は特に低く、女性は10代がピークで年齢が高くなるほど意識が低くなっている。

Q. いま現在、あなたご自身は牛乳類をどれくらいの割合で飲んだり、利用していますか。

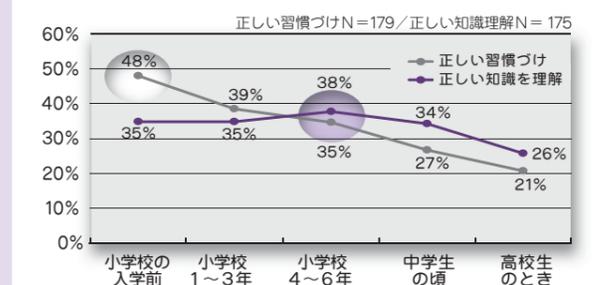


- また、男女・全年代において、ダイエット意識をもった人の方が、そうでない人よりも牛乳類飲用(利用)頻度がやや多い傾向にあることがわかった。このことから、ダイエット意識は、牛乳飲用(利用)行動の阻害要因ではないことが明らかとなった。
- なお、ダイエット意識をもっている人の具体的な取り組みのなかで「バランスのとれた食生活」が、牛乳類の飲用(利用)頻度の高い人ほど多くなっていることから、ダイエット→栄養バランス→牛乳といった文脈での訴求が効果的であることも確認できた。

牛乳飲用習慣は幼児期、牛乳の知識は小中学生を対象に

- 母親に子どもに対する食生活の取り組み状況を聞くと、「食生活の正しい習慣づけ」については、全体の34%が、「食生活の正しい知識理解」については全体の27%が「とても熱心に」または「熱心に」取り組んでいることがわかった。
- これら食育に熱心に取り組んでいる母親ほど、子どもの牛乳飲用についてとても強い希望を持っており、こうしたことから、母親の食育への取り組みを支援することが、子ども達の牛乳飲用を推進することにつながるということがわかった。

母親が、食育に取り組んで成功した時期の意識



- 食育の取り組みに成功した経験をもつ母親に対して、成功した(子どもの成長)時期を聞くと、「正しい食習慣」については、「小学校入学前」が約5割で、その後の成長にしたがって成功した比率が低下することわかった。また、「正しい食生活の知識」については、中学生までの成功率が35～40%程度で高いが、高校生になると成功率が低下することがわかった。
- こうしたことから、牛乳の飲用習慣については幼児期を対象に、牛乳の知識については児童生徒(小中学生)を対象に、施策を集中させることが効果的であることがわかった。

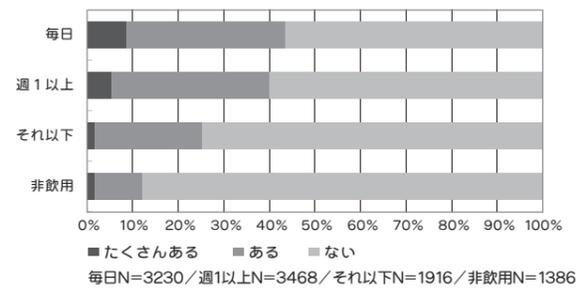
学校給食で「良い思い出」を作ることが重要

- 牛乳に対して「良い思い出」をもっている人は全体の34%、「よくない思い出」をもっている人は全体の28%であった。
- 牛乳の思い出と牛乳類の飲用(利用)頻度の関係を見ると、「良い思い出」をもっている人ほど牛乳類の飲用(利用)頻度が明らかに多いが、「よくない思い出」については、牛乳類の飲用(利用)頻度に影響を与えていないことがわかった。
- 「良い思い出」では学校給食関連が非常に多く、次いで「美味しさを実感した思い出」「ホットミルク」「牧場関連」となっている。したがって、特に学校給食での「良い思い出」づくりが、その後の牛乳飲用(利用)行動を促進することがわかった。また、非飲用者については、「よくない思い出」として「学校給食で無理やり飲まされた」ことが突出して多いこともわかった。
- こうしたことから、学校に入る前に牛乳飲用習慣を身に付けさせ、学校給食で「無理やり飲まされている」という印象を作らないこと。そして、「学校給食」の場で牛乳の「良い思い出」を作ることが、牛乳の飲用促進にとって極めて重要な施策であることが明らかとなった。

年代が若い層ほどビックママの出現率が高まる

- 母親達のネットワークにおいて、情報発信源となり他の母親に影響を与える母親(ビックママ)は、全体の1割程度存在し、年代が若い層ほど、ビックママの出現率が高まる傾向にあることがわかった。
- ビックママの情報入手先として、他の母親層と比べると、「ママ友や主婦仲間」「同性の友人知人」が多く、ビックママが、母親ネットワークにおいて情報流通を活性化させ

Q. 牛乳に関する「良い思い出(記憶)」といわれて、あなたは何か思い出すことがありますか



る役割を担っていることがわかった。

- また、「雑誌」「本(専門書)」などから情報入手も多いことがわかった。
- こうしたことから、母親への影響を強めるためには、ビックママへの情報訴求を強めるとともに、その場合は、文字メディアの利用が効果的であることがわかった。

機能情報の開発を強め、知識を高めることが重要

- 牛乳の「4大重点機能」についての認知率は、「骨の状態を良くする効果」が92%、「精神状態や睡眠の質を良くする効果」が64%、「生活習慣病を予防・改善する効果」が47%、「病気を予防する効果」が41%で、「骨の状態を良くする効果」の認知率が突出して高かった。なお、これらの牛乳の機能に関する認知率は、男女別・年齢別でさほど変わらないことがわかった。
- 健康に関する取り組み意識をみると、「骨の状態を良くする」が26%、「精神状態や睡眠の質を良くする」が45%、「生活習慣病を予防・改善する」が46%、「病気を予防する」43%で、「骨の状態を良くする」ことへの意識は他に比べて低いことがわかった。なおこれからの健康意識については、いずれも、女性の方が高く、また、「精神状態を良くする」以外は、年齢が高くなるほど意識が強まっていることがわかった。
- 牛乳の「骨の状態を良くする効果」については十分に認知が進んでいる一方で、「骨の状態を良くする」健康意識が低いことから、骨に関する健康意識を強めることによって牛乳の飲用(利用)がさらに促進されることが示唆された。
- 一方、「精神状態や睡眠の質を良くする」、「生活習慣病予防・改善する」、「病気を予防する」という健康意識が強いことから、牛乳に関する情報開発を強め、認知を高めることによって、牛乳の飲用(利用)が促進されることが示唆された。

メディアツアーを開催

都市近郊の牧場をメディア関係者と体験訪問

新聞記者・雑誌編集者を対象とした酪農現場視察会「Jミルクメディアツアー」を実施

Jミルクでは、10月11日に新聞記者・雑誌編集者を対象とした酪農現場視察会「Jミルクメディアツアー」を実施。

今回は、「都市近郊における持続可能な酪農経営の取り組み」をテーマに、首都圏近郊で、地域の他の農業や都市消費者と連携した新しいスタイルの都市型酪農を営む酪農家2軒(東京都八王子市・磯沼ミルクファーム、神奈川県伊勢原市・石田牧場)を訪問した。

参加者は新聞全国紙・通信社記者7名、雑誌編集者3名、酪農専門紙記者2名、6万人の読者(フォロワー)を持つブログ記者1名の合計13名となった。



乳搾り体験風景



都市近郊酪農の現状を知ることができた

今回のメディアツアー後、参加者に行ったアンケート調査では、「都市近郊酪農の現状を知ることができた。」や「酪農・農業に明るい未来を感じた。楽しそうだった。」、「酪農への理解、関心が深まった。」など、とてもよかったとす

る意見がほとんどであった。

さらに今後は、「牛乳乳製品の製造現場」や「先進的な取り組みをしているところ」の見学を希望している方もいることから、このような機会を実施することで、高い関心を喚起したことがうかがわれる結果となった。

また、牛乳乳製品やJミルクに関してどのようなことを知りたいかの質問では、「酪農と食育」、「殺菌技術、保存技術、加工技術」、「酪農経済的な情報、海外競争力など」、「サプライチェーン全般」、「動物福祉」など様々なものが挙げられた。

開催概要

1. 実施日時 平成24年10月11日(木)
2. 実施場所 と実施内容
 - ①磯沼ミルクファーム(東京都八王子市)
 - 酪農見学(牛舎、放牧場、堆肥舎等)
 - ランチ(屋外) 懇談
 - ②石田牧場(神奈川県伊勢原市)
 - 酪農見学・体験(搾乳・懇談等)
 - 休憩(ジェラート試食)
3. 参加対象
 - 一般紙誌記者(食品、生活、社会情報系)
 - 食関連のフリージャーナリスト
 - 業界紙



Jミルクの活動

10～12月の主な活動報告

平成24年10月1日から平成24年12月28日まで



▲第3回需給委員会



▲第4回理事会

企画情報グループ関連

■放射性物質問題への対応

<主な推進業務>

「災害等支援環境整備事業」の東北地区分の申請受付作業

■需給見通しの策定・公表

<委員会の開催等>

○第3回需給委員会（10月26日）

内容：平成24年度第3四半期までの生乳及び牛乳乳製品の需給見通し検討協議

○第4回需給委員会（12月7日）

内容：平成24年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通し検討協議

<主な推進業務>

○平成24年度・平成25年度通期需給見通しの検討

○需給・価格データの更新

○乳製品需要者動向調査の最終まとめ

○牛乳類の小売動向調査の最終まとめ

■ポジティブリスト制度対応

<主な推進業務>

○平成24年度の定期的検査終了→各団体へ報告・HPへ公表

○生産現場での「記帳・記録」の徹底を図るための啓発パンフレットの最終編集作業（11月6日：検討会）

■生乳検査精度関連

<委員会の開催等>

○第1回生乳検査精度管理委員会（10月31日）

内容：認証規定の改定（案）の検討 など

<主な推進業務>

○生乳検査精度管理認証申請確認作業

○生乳検査技術研修会（乳技協主催）での認証制度の普及活動

■共通課題への取り組み

<委員会の開催等>

○第2回課題検討委員会（11月26日）

内容：追加調査「TPPなど新たな貿易自由化による地域・関連産業、生乳供給量への影響評価」内容の検討
酪農乳業共通課題の検討

<主な推進業務>

○第2回酪農乳業セミナーの実施（14ページに記事掲載）

■活動運営事業への取り組み

平成24年度活動の進捗と課題の検討

平成25年度活動の事業計画策定開始

普及グループ関連

■牛乳乳製品健康科学情報事業関連

<委員会の開催等>

○牛乳乳製品健康科学会議幹事会（10月3日）

<主な推進業務>

○平成25年度委託研究公募開始

○「牛乳摂取とメタボリックシンドローム」論文投稿

■牛乳食育事業関連

<委員会の開催等>

○「牛乳食育研究会」設立総会（10月8日）

○「牛乳食育研究会」三役会議（10月31日）

○「牛乳食育研究会」第1回研究推進会議（12月2日）

<主な推進業務>

○平成25年度委託研究公募開始

■牛乳乳製品価値向上活動事業関連

<委員会の開催等>

○「乳の社会文化ネットワーク」活動検討会（11月16日）

<主な推進業務>

○情報収集整備活動

○平成25年度委託研究公募開始

■乳の学術連合活動

<委員会の開催等>

○「乳の学術連合」第1回運営委員会（5ページに記事掲載）

■インフルエンサー情報活動事業関連

<委員会の開催等>

○第2回栄養士向け情報開発研究会（11月19日）

<セミナー等の開催>

○栄養士セミナー事前打ち合わせ（10月24日）

○牛乳食育研修会（vol.6・8～9ページ参照）

<主な推進業務>

○栄養教諭・学校栄養士向け冊子「牛乳・乳製品の知識」2012版発刊

○アンチミルク対応ガイドブックの作成作業を開始

○減塩促進プロジェクト（日本栄養士会の活動への支援）

内容：健康日本21（第2次）の目標に掲げられている減塩及びCa不足対策を「和食料理への牛乳利用」により促進していくことを東北（秋田、宮城）から発信

○栄養士（学校栄養士含む）向け冊子「牛乳・乳製品の知識」増刷

■業界向け情報発信事業関連

○リーフレットをホームページにアップ

「冬は体も心もポカポカになる オリジナルホットミルクでリラックスタイム」

■学校給食用牛乳飲用定着事業関連

○理事会で承認された学乳問題特別委員会の要領に基づき、会員団体に委員の推薦依頼文書を発信

■活動運営管理事業関連

<委員会の開催等>

○第4回マーケティング委員会（12月14日）

内容：①平成24年度 牛乳乳製品に関する食生活動向調査 報告
②平成25年度 普及関連事業の考え方について

<主な推進業務>

○「牛乳乳製品に関する食生活動向調査」速報を12月18日公表

○一般生活雑誌における牛乳の記述調査（下記参照）

○インターバル速歩 塾大リサーチセンターより指導
内容：体重、体脂肪、血圧、運動実績のデータを収集・個別指導

○牛乳飲用コホート分析

内容：専修大学森宏名誉教授による家計調査をベースとした世代毎の牛乳飲用量推計データのコホート分析。
（内容整理の後、報告の予定）

総務広報グループ関連

■広報関連事業

<主な広報活動等>

○メディアへのリリース

<主な推進業務>

○WEBサイトリニューアル移行補修作業

○取材対応 10/19日本農業新聞、10/31読売新聞

■総務関連事業

<会議の開催等>

○第4回理事会（10月18日、平成24年度上期事業報告、下期課題、役付理事の選任ルール）

■一般社団法人移行申請関係

○内閣府公益認定委員会ヒアリング（10月24日）

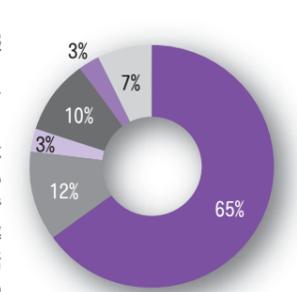
○ヒアリングで指摘を受けた部分の修正案を提出（10月30日）

雑誌における牛乳乳製品の記述は、65%が料理レシピ

一般生活雑誌における牛乳の記述調査より

国内で発行されている雑誌のうち「料理」、「健康」、「育児」、「生活実用情報誌」のジャンルに当てはまる59種類、105冊の雑誌における牛乳乳製品の記述を調査。雑誌における記述の出現は約65%がレシピになっていた。また「健康」ジャンルでは、「健康」「効能」の比率が高くなっているが、「生活実用情報誌」ジャンルにおいては出現回数が多いにもかかわらず「健康」「効能」に関するものが少なく、代わりに「商品CM」が多い、などの傾向が見えた。

牛乳乳製品の記述記事



■ レシピ ■ 健康
■ 効能 ■ 商品CM
■ グルメ ■ その他

酪農乳業セミナーを開催

今後の国際的な穀物・食糧事情について情報共有

開催日：平成24年11月5日【仙台】、11月14日【札幌】、11月22日【東京】

第2回の酪農乳業セミナーは、①今後の酪農政策の方向性についての情報共有化を図る。②今後の国際的な穀物・食糧事情について情報を提供し、酪農乳業共通課題としての取り組み推進への一助とすることを旨として開催。2氏の講演が行われた。

東京会場で農水省の菅家氏は、生乳需給をめぐる現状と、25年度予算概算要求の概要について、対策のポイント、政策目標、主な内容について講演した。

次に柴田氏の「今後の国際的な穀物市場の動向について」講演要旨を紹介する。

世界の穀物市場のステージが変わった



柴田 明夫 氏
(株)資源・食糧問題研究所 代表

2007年から2008年にかけて、穀物は歴史的な高値をつけた。投機マネーによる一過性の上昇だという見方もあるが、私は2000年代に入って世界の穀物市場のステージは大きく変わったとみている。安い食糧価格の時代は終わった。特に需要で見ると、前年を下回ることなく過去最高を更新し続けている。日本は3千万トンの食糧を恒常的に輸入している。今世紀に入ってから生産サイドではブラジル、アルゼンチン、ロシア、ウクライナ、カザフスタンといったところが輸出国として加わってきた。



東京会場では141人が参加した

講演Ⅰ「次年度の酪農・乳業予算の方向性について」

農林水産省生産局畜産部 牛乳乳製品課 係長 舘 敦史氏（仙台）
課長補佐 本田光広氏（札幌）
課長 菅家秀人氏（東京）

講演Ⅱ「今後の国際的な穀物市場の動向について」

(株)資源・食糧問題研究所 代表 柴田明夫氏

※参加人数：仙台40人、札幌61人、東京141人

新興国が加わって情報が透明ではなくなっている状況にある。需要サイドでは中国が6千万トンを超える大豆の輸入国としてすでに登場している。中国の影響は非常に大きい。

世界の食糧の需給動向は、1990年代までは大体18億トンくらいで横ばい。2000年以降拡大し、昨年は大体23億トン規模になっている。この10年間で市場規模が変わったのは、飼料用穀物の需要が急増している。価格が上がれば生産が刺激されて増産され、需給バランスが働いて値段が元のレベルに戻るといのがレーショニングだが、この10年間レーショニングは起きていない。歴史的な高値にもかかわらず需要は減っていない。世界の食糧需給はひっ迫傾向が強まる。

需給のひっ迫傾向によって世界的な農業開発ブームが起きているが、世界の穀物収穫面積の約3割を占める灌漑農業では、地下水枯渇が問題になっている。地球の温暖化、水不足、植物の多様性が失われるというリスクも高まっている。

国際穀物マーケットは、23億トンの生産規模に対して、輸出に供されるのは3億トンくらい。生産量からみると8分の1の薄いマーケットである。

世界の食糧需給からみると、日本の3千万トンの輸入は明らかに不足するという形で認識されることになるだろう。国内をもう一度見直して、農業資源のフル活用、地域資源のフル活用をするというところに転換し、農業、酪農畜産を立て直す時期にきている。社会・経済の萃点として農業・食品産業はある。

※詳細はHPをご覧ください。

<http://www.j-milk.jp/gyokai/news/berohe000000bt11.html>

Pick Up ●●●●●●●●

牛乳食育研究会設立総会を開催（東京都・平成24年10月8日）

酪農や牛乳乳製品がもつ優れた教育的・栄養学的可能性を活かす



牛乳食育研究会 会員名簿

氏名	所属
● 角屋 重樹	文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部部長
● 田中 博之	早稲田大学教職大学院 教授
● 石井 雅幸	大妻女子大学家政学部児童学科 准教授
木下 博義	広島大学大学院教育学研究科科学文化教育専攻自然システム教育講座 准教授
木村 純子	法政大学経営学部市場経営学科 教授
児玉 浩子	帝京平成大学健康メデイカル学部健康栄養学科 教授・学科長
小山 浩子	管理栄養士・フードコーディネーター
鈴木 明子	広島大学大学院教育学研究科人間生活学教育講座 准教授
鈴木 由美子	広島大学大学院教育学研究科学習開発学講座 教授
高増 哲也	神奈川県立こども医療センターアレルギー科医長 栄養サポートチーム座長
長島 美保子	公益社団法人全国学校栄養士協議会 会長
藤本 勇二	武庫川女子大学文学部教育学科 専任講師
藤原 勝子	食育アカデミー校長（株式会社食生活プランニング代表取締役）
松原 明子	プランナー&コーディネーター（有限会社オフィス ラ・ポート取締役）

●は代表幹事、●は副代表幹事、●は事務局長

乳の学術連合の構成組織の一つ「牛乳食育研究会」の設立総会が10月8日に開催された。当日は設立発起人6名、設立時点の会員候補者8名のうち5名の計11名。またサポーターとして酪農乳業関係団体、関係報道機関の出席を得て開催された。

代表発起人として角屋重樹氏が、「牛乳も食育も色々な課題を抱えています。その2つのキーワードをくっつけて新たな研究領域を作るといことです。課題を解決していくためには色々な側面からの知見が必要であり、それが会員メンバーの特徴となっています。また、研究方法については、客観性と妥当性を厳密に吟味しなくてはいけないということが特色です。」と挨拶した。

また(社)日本酪農乳業協会 前田浩史専務理事が、経過報告および「牛乳食育研究会」への期待を述べ挨拶とした。

協議では、発起人を代表して鈴木由美子氏が設立趣意書を読み上げ、拍手をもって承認された。

また、代表幹事、副代表幹事、事務局長の選出、今後の牛乳食育研究会の活動について協議を行い、設立総会を締めくくった。

Pick Up ●●●●●●●●

メディア懇談会を開催（東京都・平成24年12月18日）

専門紙・誌各社との連携を強め、生乳の流通情報や牛乳乳製品の価値向上に取り組むJミルク活動の認識を深めてもらうことを目的として、12月18日メディアを対象とした懇談会を開催した。

懇談会では、前田浩史専務理事が、「牛乳乳製品に関する食生活動向調査」の速報および、「ワールドデ일리リーサミット2013@横浜」についての説明を行った後、各社との意見交換を行った。

特に、「ワールドデ일리リーサミット2013@横浜」については、世界から約60カ国の酪農関係団体やメーカー、研究者ら約1200~1500名が集う大規模なものであるとの説明から、どこに注目し、情報を発信すべきかなど、各社からの質問が飛んだ。

IDF WDS 横浜2013プログラムスナップショット

日	時間	会場	内容
12月18日	10:00-11:00	横浜	開会式
12月18日	11:00-12:00	横浜	ワールドデ일리リーサミット2013@横浜
12月18日	13:00-14:00	横浜	メディア懇談会
12月18日	14:00-15:00	横浜	閉会式

5日間にわたり酪農、栄養健康、政策・経済、マーケティングなど多岐にわたるプログラムが公開された。



酪農乳業の情勢

牛乳乳製品の国内生産額は増加

農業・食料関連産業の経済計算から国内生産額の推移をみる



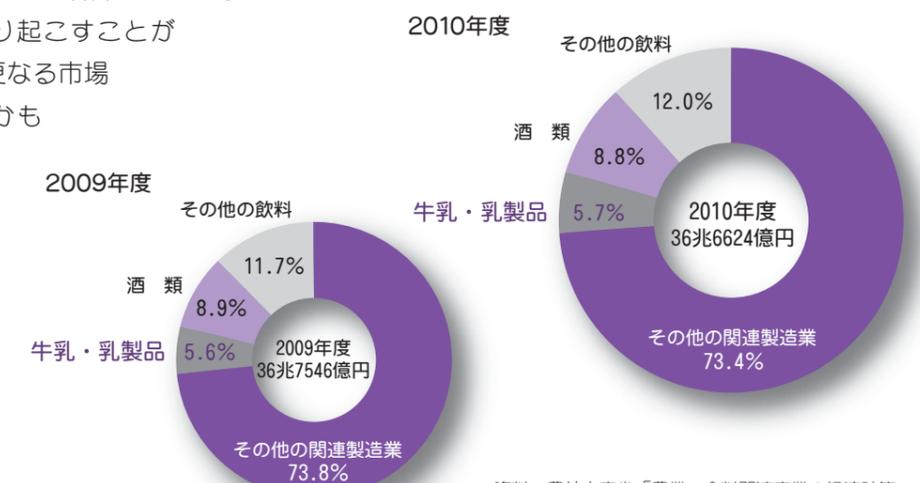
国内生産額では「牛乳乳製品」が微増、「その他の飲料」ではそれ以上の増加を見せている

農林水産省が発表している「農業・食料関連産業の経済計算」を見てみると、2010年度における関連製造業全体の国内生産額は、36兆6,624億円で、2009年度（36兆7,546億円）と比べ約0.3%減少した。これを2001年度と比べてみると、1兆5,000億円も減少しており、関連製造業の市場規模自体が縮小していることが分かる。

この様な中、牛乳・乳製品の国内生産額についてみると、2010年度は、2兆871億円で2009年度（2兆747億円）と比べ約0.6%増加した。2001年度と比べると930億円ほど生産額が増加している。

また「牛乳類」の競合となる「その他の飲料」に目を向けると、2010年度は、4兆4,091億円で2009年度（4兆5,113億円）と比べ約1.3%増加した。2001年度と比べると2,070億円ほど生産額が増加しており、増加傾向は「牛乳乳製品」よりも強い。

関連製造業全体の国内生産額が減少している中で、「牛乳乳製品」の国内生産は堅調であり、また「飲料」分野では、それ以上の市場規模拡大を示している。消費者の「飲料」における潜在的ニーズを掘り起こすことが「牛乳乳製品」の更なる市場規模拡大に繋がるかもしれない。



資料：農林水産省「農業・食料関連産業の経済計算」

年度	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
農業・食料関連産業	105,635.4	104,332.0	102,240.6	101,560.1	99,723.8	98,422.8	98,354.9	99,099.7	95,288.5	94,348.3
農・漁業	12,186.0	12,267.7	12,077.3	11,994.1	11,677.6	11,583.0	11,558.1	11,697.5	11,269.9	11,111.1
関連製造業	38,167.7	37,684.5	37,145.6	37,623.6	36,745.1	36,906.8	37,869.9	38,262.6	36,754.6	36,662.4
牛乳・乳製品	1,993.7	2,031.6	2,035.8	2,024.0	2,014.5	2,022.1	2,042.0	2,074.0	2,074.7	2,087.1
酒類	4,060.7	3,796.3	3,587.4	3,487.2	3,497.4	3,370.6	3,362.4	3,347.1	3,284.5	3,243.3
その他の飲料	4,202.1	4,146.9	4,124.9	4,445.3	4,451.1	4,489.1	4,572.7	4,511.3	4,353.6	4,409.1
(参考) 全産業	924,528.7	909,265.4	909,031.5	927,342.7	951,287.3	976,217.4	1,000,759.9	1,001,480.1	875,526.8	907,327.7

資料：農林水産省「農業・食料関連産業の経済計算」第1表 農業・食料関連産業の国内生産額
注意：2010年度は速報値

Pick Up

平成25年乳業13団体合同新年賀詞交歓会開催 (東京都・平成25年1月8日)

関連団体や酪農乳業関係者、関連省庁幹部、会員企業など約1000名が出席し、盛大に開催された。

「平成25年乳業13団体合同新年賀詞交歓会」が1月8日、東京のホテルグランドパレスで開催され、会員企業、関連団体のトップや関係省庁幹部など酪農乳業関係者約1000名が出席した。

代表して挨拶した(一社)日本乳業協会会長の中野吉晴氏は「東日本大震災からの復興も道半ば。汚染堆肥問題、風評被害など復興施策の推進が最優先の課題」と強調。「また、新政権における経済対策、経済の再生が酪農乳業界にとってもプラスになる」と期待感を示した。さらに昨年の酪農乳業界では生乳が9年ぶり増産、発酵乳生産量が過去最高を更新と成長への期待を述べた。

ただ需要が供給を上回る構造は変わらないことから、「国産乳製品市場が衰退せず、日本の酪農乳業基盤が弱体化しないよう、官民挙げた連携を引き続きとっていく。国産乳製品の需要を守り、酪農乳業基盤の維持には、需要の安定と消費拡大が大切。消費の拡大には、供給、品質、価格の3つの安定がポイントとなる。」と述べた。

一方、農水省の原田畜産部長は「日本の酪農は、国の基であり、長年日本の農業を支えてきた。乳業界は絶えず新商品を開発しており、まだまだ伸びる力がある業界だ」と祝辞を述べた。

<Jミルク浅野会長挨拶主旨>

昨年、酪農乳業界には明るい話題がふたつあった。ひとつは、9年ぶりに生乳生産が前年を上回ったということ。この生乳生産の回復は今年以降も続けていくことが大事。そのためには、官を含め業界を挙げて生乳生産基盤の強化への取り組みをお願いしたい。この生産の強化が需給の安定につながり、需給の不安定から乳製品以外へ流れたお客様を取り戻すことになる。もうひとつは、昨年、ヨーグルトが過去最高の生産量、金額になったこと。これも昨年で終わらせることなく、また、ヨーグルトだけではなく本命の牛乳についても普及拡大させることが大事。そのほか、チーズ、生クリームなど牛乳乳製品の普及拡大を図っていくことが業界全体の使命である。そのためにJミルクでは「牛乳乳製品健康科学会議」、「乳の社会文化ネットワーク」、「牛乳食育研究会」の3つの研究組織を有機的に結合して牛乳の普及拡大を進めたいと考え「乳の学術連合」を昨年12月に発足させた。今年、Jミルクでは、これを軸にして今まで以上に普及拡大に力を入れていく。



Pick Up

ミルクレシピを紹介しています

<http://www.j-milk.jp/recipes/index.html>

昨年、リニューアルしたJミルクのホームページ。刷新した「ミルクレシピ」のページでは、「素材別で探す」、「カテゴリで探す」、「目的別で探す」、「世界の料理」と様々なレシピを検索しやすく取りまとめています。また「今月人気のレシピ」を1位から10位まで順位づけて掲載。さらに材料や作り方だけでなく「栄養成分」も掲載していますので、ぜひご利用ください。



栄養成分も表示



今月の人気レシピを順位で表示

海外視察報告

世界の酪農乳業の経験を共有化する貴重な機会！

～IDF WDS 2012 at ケープタウンに参加して～

昨年11月4～8日、「IDF WORLD DAIRY SUMMIT (IDF WDS) 2012」が南アフリカ共和国のケープタウンで開催され、1000名を超える世界の酪農乳業関係者が一堂に会した。

「IDF WDS」は、国際酪農連盟 (IDF) の主催により、IDF加盟の54カ国が持ち回りで、毎年1回開催するもので、「酪農乳業に係る優れた技術や研究について、世界の酪農乳業関係者が、お互いに情報交換を行うことにより、牛乳乳製品や酪農乳業の新しい価値を産み出す」ことを目的にしている。本年の秋に横浜で「IDF WDS 2013」が開催されることもあり、日本からは50人を超える関係者が出席した。

WDS 2012のテーマは「世界は一つの国である」。このテーマは、WDS 2012の場を、世界の多様な文化、地域や国における異なった経験について、世界の酪農乳業関係者は意見交換を行うプラットフォームにしたいという趣旨で、人種や文化、政治において極めて多様性に富む南アフリカらしいテーマ設定であるという印象を受けた。

期間中に開催されたセッションは、①経済と政策、②農場管理、③食品安全、④分析方法、⑤新興国の酪農、⑥栄養と健康、⑦持続可能性とグリーンエコノミー、⑧乳の科学と技術、⑨家畜の栄養と福祉、⑩マーケティングの各テーマに加え、世界の各地域の酪農乳業のリーダーが意見を述べる⑪リーダーズ・フォーラムの全11セッション（特別講演会）。

開会式で挨拶にたったIDF会長のRichard Doyle氏は、WDS 2012のプログラムの中で重要と思われる次の三つの課題に言及した。

一つは、環境への取り組みにおける水資源保護の課題である。日本では余りピンとこないが、国際的には二酸化炭素排出量の削減と同様に不可避的な環境問題であり、酪農乳業の経済活動において積極的な取り組みが求められている。

二つ目は、乳のタンパク質の評価に関する項目。FAOによる食品タンパク質の査定が新しい方法に置き換えることで、他食品の栄養を補足する乳タンパクの役割が改めて評価されるようになる。今後、世界中で食料がますます不足し、子供達や高齢者の栄養不足という現実的な課題が生じることが予



WDS2012日本ブース

測されているなかで、乳製品の価値が高まっていくという点である。

三つ目は、安全で持続性のある生乳と乳製品の供給という課題の中で、特に、危険管理の改善、志賀毒素生産性大腸菌 (STEC・Shiga toxin producing E)*の多様な系統をモニターする必要性、最新の知識のアップデート、生産及びフードチェーンでの衛生管理の重要性についてである。

*日本で一般に呼ばれる「腸管出血性大腸菌 (EHEC・enterohemorrhagic E. coli)」とほぼ同意語。

何れにしても、世界各国の酪農乳業は、その歴史や文化的背景、産業の成長段階などが異なることから抱えている課題も異なる。しかし、普遍的な共通した課題もある。また既に顕在化した課題、いまだ顕在化してはいないが将来同様の問題に突き当たると予想できるものもある。したがって、「IDF WORLD DAIRY SUMMIT」は、多様な課題に対する世界の酪農乳業の経験を共有化することで、日本の酪農乳業の今後のあり方や抱えている課題への対処方法などについて考えることが出来る貴重な機会であると言える。

本年(平成25年)の10月28日(月)～11月1日(金)、横浜で開催される「IDF WDS 2013」を、わが国酪農乳業の発展への新たな道筋をつける重要な機会として、是非、成功させたいものである。Jミルクとしても関係団体と連携して、その成功にむけて積極的な取り組みを行うことにしている。

(Jミルク 前田)

各地においてブロック会議を開催

開催地	開催日時	開催都市	開催場所
札幌会場	3月26日(火) 13:30～16:00	北海道札幌市	KKRホテル札幌5階 丹頂の間
仙台会場	3月19日(火) 13:30～16:00	宮城県仙台市	仙台青葉カルチャーセンター 4階 403号室
東京会場	3月15日(金) 13:30～16:00	東京都千代田区	都道府県会館 1階 101
名古屋会場	3月28日(木) 13:30～16:00	愛知県名古屋市	大津橋会館 5階大会議室
京都会場	3月29日(金) 13:30～16:00	京都府京都市	京都府立総合福祉会館(ハートピア京都)第5会議室
岡山会場	3月21日(木) 13:30～16:00	岡山県岡山市	ピュアリティまきび
福岡会場	3月22日(金) 13:30～16:00	福岡県福岡市	TKP天神シティセンター アネックス ホールB

今後のスケジュール 平成25年2月1日～平成25年3月31日までの会議・行事の開催予定を掲載致します。

	開催日	場所	内容	講師(敬称略)
第2回普及専門部会	2月1日	Jミルク会議室	25年度普及関連事業計画について	
栄養士セミナー	2月2日	沖縄	「牛乳を科学する 牛乳の魅力を再発見！」	戸塚 護 他
健康科学会議 骨の健康 分科会	2月6日	Jミルク会議室	学術研究・総説に関する意見交換 他	
業界向けセミナー	2月8日	札幌	「牛乳乳製品摂取はメタボリックシンドロームを救えるか」	細井 孝之
第3回栄養士向け情報開発研究会	2月18日	Jミルク会議室	ライフステージ別情報開発について	
健康科学会議 生活習慣病予防 分科会	2月19日	Jミルク会議室	学術研究・総説に関する意見交換 他	
第6回理事会	2月20日	Jミルク会議室	24年度臨時総会の招集(H25年度事業計画・収支予算について)	
牛乳乳製品健康科学会議 顧問会議	2月23日	Jミルク会議室	24年度牛乳乳製品健康科学会議活動報告 他	
牛乳食育研究会 研究審査委員会・幹事会	2月24日	Jミルク会議室	25年度学術研究公募審査 他	
業界向けセミナー	2月25日	名古屋	「牛乳乳製品摂取はメタボリックシンドロームを救えるか」	細井 孝之
第3回課題検討委員会	未定(2月)	Jミルク会議室	酪農乳業共通課題の検討	
全国生乳検査技術者連絡会研修会	2月28日～3月1日	東京	全国の生乳検査担当者を対象とした情報交換及び研修会	
健康科学会議 免疫調節 分科会	未定	Jミルク会議室	学術研究・総説に関する意見交換 他	
乳の社会文化ネットワーク 研究審査委員会・幹事会	3月4日	Jミルク会議室	25年度学術研究公募審査 他	
牛乳乳製品健康科学会議 研究選考委員会・幹事会	3月4日	Jミルク会議室	25年度学術研究公募選考 他	
第31回メディアミルクセミナー	3月5日	大手町サンクイプラザ	「新しい、乳を使った和食の減塩メニュー」(仮題)	小山 浩子
第3回臨時総会(予定)	3月6日	KKRホテル	25年度事業計画・収支予算について	
健康科学会議 リラックス・安眠 分科会	3月6日	Jミルク会議室	学術研究・総説に関する意見交換 他	
牛乳食育研究会 総会	3月17日	Jミルク会議室	25年度活動計画について 他	
生乳検査精度管理認証特別委員会	未定(3月下旬)	Jミルク会議室	生乳検査精度管理認証施設の審査等	
牛乳乳製品健康科学会議 総会	未定(3月末～4月初旬)	未定	25年度活動計画について 他	
乳の社会文化ネットワーク 総会	未定(3月末～4月初旬)	未定	25年度活動計画について 他	
生乳検査精度管理委員会	未定	Jミルク会議室	特別委員会の内容報告等	

※上記は予定であり、日時・場所・講師等変更する場合があります。

編集後記

- 今回の「乳の学術連合」の窓は、Jミルクの外部連携組織である「牛乳食育研究会」代表幹事の角屋先生にご登場いただきました。「食」という字は、「人」を「良く」と書きます。食育に関する貴重なご見識に感謝！
- 「乳の学術連合」運営委員会が始動。新たな活動計画が承認され、今後が期待されるとともに、責任重大です。
- Jミルクの調査活動について、「牛乳乳製品に関する食生活動向調査」の概要を紹介いたします。主な知見を速報として紹介しましたが、詳しくはJミルクのHPに掲載中ですので、ご覧ください。(T. I)